

「正しい戦争」と「法に従って戦う」

『一致信条書』CA 16 条と弁証 16 条の“iure”の訳語の問題

鈴木 浩

1. はじめに

日本福音ルーテル教会は「信条集専門委員会」の名で1982年5月、『一致信条書』を翻訳・出版した。この訳書の完成に対して、同年8月の日本福音ルーテル教会の総会は「感謝決議」をもって応じた。また、本書の出版に先立って、1979年には『アウグスブルグ信仰告白とその解説』が出版されていた。

本書の翻訳は、すでに翻訳され、あるいは出版されていた、『一致信条書』に含まれる諸信条に、未だ翻訳されていなかった部分を翻訳してそれに加え、完成したものである。

この翻訳は、総会の「感謝決議」に見られるように、「一致して」感謝をもって受け取られるかに思われたが、その直後から批判を受けることになった。ここでは、誤訳、訳語の不統一などの指摘が行われた。この批判が契機になって、『一致信条書』への関心がある意味で高まったことは事実であったが、同時に、その翻訳に対する信頼性を失わせる結果ともなった。また、機関誌「るうてる」はその1985年9月号に「『一致信条書』をどう生かすか」という座談記事を付録として掲載した。

この間、日本福音ルーテル教会「信仰と職制委員会」は批判に応じて、「訳語の正誤表」を作成する作業を継続していた。確かに指摘されるような箇所があったからである。そしてその作業の結果が1986年の総会の資料として、「これは暫定的なものである」という主旨のコメントと共に印刷・配布された。しかし、この「正誤表」に対しては、総会では何のリアクションもなかった。

筆者は、その「正誤表」を作るための訳文の見直しを委嘱された者のひとりであったが、担当した部分は、「古典信条」「アウグスブルグ信仰告白」「アウグスブルグ信仰告白弁証」であった。

その作業の中で、特に関心をもって関連資料を集め、検討したのは、アウグスブルグ信仰告白と同弁証の16条の部分であった。なぜなら、この部分の訳語が

特に取り上げられて、第17回教職神学セミナーの報告「今日の日本におけるルーテル教会」(日本ルーテル神学大学・大学と教会委員会)で「公的な批判」を受けていたからである。

以下はその批判に対する反批判ではなく、批判された箇所 of 正確な理解に資するために書いたものである。なお、最初の稿は作業委員で検討するために書き、それに手を加えたものを、6月27日のルター研究所の勉強会で発表した。本稿は、それに手を加えたものである。文中の「CA」は「アウグスブルグ信仰告白」の略であり、「弁証」は「アウグスブルグ信仰告白弁証」の略である。

2. 問題の所在

「CA」16条のラテン語本文と「弁証」16条ラテン語本文には、戦争行為の正当性に関連して、次の様な表現が見られる。

iure bellare, militare (CA)

iure bella gerere, militare (弁証)

そして、この部分の日本語訳はそれぞれ、

「正しい戦争に従事し、兵士となり」(CA)

「法に従って戦い、軍務につき」(弁証)

となっている。

この翻訳に対して、批判がなされた。(第17回教職神学セミナー「今日の日本におけるルーテル教会」・序「歴史を検証し展望をきりひろくために」清重尚弘)。

「CA 16条に有名な『正しい戦争』という表現が見える。この箇所は、現代の戦争と平和の問題に多少とも関心のある者には最初に気になるテキストのひとつである。この訳語が、CAと弁証論とは一致していないのである。一方では『正しい戦争』他方では『法に従って戦う』となっている。原語は同じである」(同7頁)。

「現代の戦争と平和の問題」を考える際に、「正しい戦争」という理念・表現は確かに極めて重大な問題をはらんでいると言える。このことに関わって、教会としての責任ある姿勢を世に明らかにしようという動きも見られる。一例を挙げれば、カトリック教会は第2バチカン公会議を経て、「正しい戦争」という理念を神学的に正当化したアウグスティヌスやそれを体系化したトマス以来の伝統的な立場に、根本的な修正を行った。(『現代世界憲章』第2部「若干の緊急課題」第5章「平和の推進と国際共同体の促進」参照)。

この公文書においては、伝統的に用いられてきた「正しい戦争」(*iustum bellum*)や「正しい戦争を行う権利」(*ius iusti belli*)という表現はなくなり、終末論的観点から「戦争の絶対的禁止」が目指されている。以前の *ius iusti belli* という「積極的な表現」に代わって登場するのは、*ius legitimae defensionis* (正当防衛権)である。しかも、それは積極的に肯定されているというのではなく、「平和的解決のあらゆる手段を講じたうえであれば、政府に対して正当防衛権を拒否することはできないであろう (*denegari non poterit*)」という消極的な立場なのである。

ところで、批判の主旨は、こうした重大な問題を含んだ用語の翻訳に、一方では「正しい戦争に従事し」、他方では「法に従って戦い」と、違った訳語を当てているのは、ルーテル教会の公的な文書である『一致信条書』の翻訳・編集に一貫性がないことの証拠であり、それはひいては、日本福音ルーテル教会の「後進性」のしるしである、というものである。

ここでは、一方では「正しい戦争に従事し」と訳され、他方では「法に従って戦う」と訳されている「CA」と「弁証」の本文そのものを、その文脈と共に検討する。しかしここでは、本文の検討だけに限定し、「現代の戦争と平和の問題」からの評価・批判はとりあえず棚上げする。つまり、現代の視点をそこに読み込むことなく、本文が何を言っているのかを、本文に則して検討したい、ということである。訳語が問題になる時に「最初に」しなければならないのは、そのことからである。

3. 「CA」と「弁証」のラテン語本文

問題の句を含む文章をその前後の文脈と共に掲げる

Confessio Augustana

De rebus civilibus docent, quod legitimae ordinationes civiles sint bona opera Dei, quod christianis liceat gerere magistratus, exercere iudicia, iudicare res ex imperatoriis et aliis praesentibus legibus, supplicia iure constituere, *iure bellare, militare*, lege contrahere, tenere proprium, iurare postulantibus magistratibus, ducere uxorem, nubere.

Apologia confessionis

Articulus XVI recipiunt adversarii sine ulla exceptione, in quo

confessi sumus, quod liceat christiano gerere magistratus, exercere iudicia ex imperatoriis legibus seu aliis praesentibus legibus, supplicia iure constituere, *iure bella gerere, militare*, iure contrahere, tenere proprium, iusiurandum postulantibus magistratibus dare, contrahere matrimonium, denique quod legitimae ordinationes, civiles sint bonae creaturae Dei et ordinationes divinae, quibus tuto christianus uti potest.

ここでは「この世の正当な秩序」(legitimae ordinationes civiles)は、「神のよきみわざ」(bona opera Dei, CA)「神のよき被造物にして神的な秩序」(bonae creaturae et ordinationes divinae, 弁証)であることが主張され、そのような神的な秩序の一環として iure bellare, militare あるいは iure bella gerere, militare することは、「キリスト者にとって正当なことである」(christianis liceat, CA; liceat christiano, 弁証)とされているのである。

ところで批判では「一方では『正しい戦争』他方では『法に従って戦う』となっている。原語は同じである」となっている。細かいことではあるが、実は原語は同じでは「ない」。一方では iure bellare であり、他方では、iure bella gerere だからである。従って、引用としては「正しい」戦争、「法に従って」戦う、とすべきであろう。

さて、「CA」では「正しい」と形容詞に訳され、「弁証」では「法に従って」と副詞句に訳されている「原語」は iure である。

問題は、この iure をいかに理解するかである。この言葉を「正しい」と形容詞に訳すのは正当か、「法に従って」と副詞句に訳したのは正しいのか、ということになる。

4. iure とはということか

まず、iure についてその語義、形態、用法など、文法的なことを検討する。

iure は名詞 ius の「単数・奪格形」である。ius はインド・ヨーロッパ祖語にまで遡る古い単語であり（サンスクリット語 yoh, yus）、様々な意味で用いられるが、基本的な語義は、「拘束力を持つもの」「義務的なもの」であり、そこから、「法、正義、権利、義務」などの意味で用いられ、更には「法廷」「法体系」などを意味することにもなった。

ius iusti belli は「正しい戦争の権利」であり、ius legitimae defensionis

は「正当防衛の権利」である。また *ius criminale* は「刑法」、*ius gentium* は「万民法、国際法」、*ius belli* は「戦争法」である。多くの場合「法」あるいは「権利」という意味で使われるが、「法」や「権利」をそうあらしめる、その背後の「正義」という観念がそれに伴っていることは、*iustus*「正しい」(名詞として使われると「義人」)が *ius* の派生語であり、更に *iustitia*「正しいこと、義」が *iustus* の抽象名詞化であることにも現れている。参考までに言えば、「義とする」という動詞は *iustus* + *facio* すなわち *iustificare* であり、「義認」はその名詞形 *iustificatio* である。それらはすべて *ius* の派生語である。

ところで、この場合の「法」は、明確に実定法を示す *lex* より広い観念であることに注意する必要がある。無論、実定法を示すこともあるが、*ius hominum*「人間の法、自然法」というように、「書かれない法」を言う場合には *lex* ではなく *ius* を用いる。すなわち、

lex → 書かれた法、実定法。従って、旧約の律法も *lex* と言われる。

ius → 人間を拘束する法、正義、権利、義務

である。また、ラテン語には同じように「法」を意味する *fas* があるが、これは *ius* があくまでも人間に関連したものであるのに対して、「神的な法」を意味した。従って、ローマ人の間では次のような成句が使われた。

si fas ius-que est すなわち「もし天と人が許すならば」という意味である。

ius は「人間が人間であれば、当然に守るべき普遍的な、人間を方向づけるもの、規制するもの」であり、*lex* は、それが具体化された法文のことである。つまり、同じ「法」でも *lex* は *ius* の下位概念であり、*ius* は更に *fas* の下位概念ということになる。

問題の *iure* は、そのような意味を持つ *ius* の「尊格」である。「尊格」の原義は「……から」であり、分離、起源、理由、手段を示す。従って、*iure* は「*ius* によって、*ius* に従って」ということになる。すなわち「法によって、法に従って」である。

ところで、ラテン語の「尊格」は、ラテン語の文法の中では重要な機能を持っていて、頻繁に使われる。ことにも、古典用法では「尊格別句」という用法の中で、多用される。

Forma mutata, mutatur substantia (形式が変われば、実質も変わる)。

Forma mutata が「尊格別句」であり、ギリシャ語では尊格が欠けているので「属格」で代用される表現である。

また、「奪格」はもともと名詞変化の一部である、ということがほとんど意識されなくなって、「副詞」として意識されることがある。つまり、独立した単語として意識されるようになる場合があるのである。この *iure* もそうであって、かなり独立性が高く、独自の単語のように意識された。多くの辞書は、*iure* を独立の単語としては認めないで、*ius* の項の中で扱っているが、最近出版された Oxford Latin Dictionary は、独立したエントリーにし、副詞として扱っている。

5. 訳語の検討

以上見てきたように、*iure* は「法によって」「法に従って」という意味である。この場合の「法」は、実定法のことではなく、つまり、具体的な「戦時法」のことではなく、もっと広い意味の法であり、「正義に従って」とも訳しえるものである。

従って、「弁証」の *iure bella gerere* の訳語「法に従って戦い」は、「法」が上に見たような意味で理解される限り、原文の「副詞（奪格）」が「副詞句」に訳され、シンタックスの上でも原文の構造を保っているので、適切な訳語と思われる。もし、翻訳においても原文のシンタックスが保たれねばならない、とすれば、*iure* は、「法に従って（よって、基づいて）」と訳す以外にはないことになる。

ところでこの場合、「法に従って戦い」という句で、当時の人々が具体的に何を意識したかが問題となる。具体的な「国際法」でも「戦時法」でもないとするば（なぜなら、ここでは戦争を行うことが、「信仰的に見て」正当であるかどうか、が問題になっているのであるから、仮にそうしたものがあつたにしても、問題は「法律的な」ことではなく⁽¹⁾、「神学的な」事柄だからである）、それは、戦争の神学的正当性を論じた「正戦論」である。

いくつかの資料を検討したところでは、「正しい戦争」という観念を神学的に正当化し、後世に影響力を与える仕方で定式化したのは、アウグスティヌスである。また、それを更に体系化し、ほとんど自明のものとしたのは、トマスである。改革者たちも「基本的には」⁽²⁾ その線に立っていた。従って、「弁証」16 条ではその冒頭で、「論敵たちは16 条を、例外なしに受け入れている」と、福音主義陣営とカトリック陣営とが、「戦争を行うことを含め」この世の秩序に関しては、同じ理解をもっていることを表明できたのである。

「法に従って戦い」とはここでは、アウグスティヌス以来、更にはまたトマス以来、西方教会の主流派の中でほとんど自明の事柄になっていた「正戦論」を原則的に受け入れ、その論理に従って戦争を行う、という意味を持っていたと考え

ていいし、当時はそのように受け取られた、と言っていいであろう。

ところで、いま述べたことを具体的に実証しているのが、「CA」のドイツ語本文である。そこでは、ラテン語本文で *iure bellare* となっている箇所が *rechte Kriege führen* となっている。つまり、「法に従って戦い」という言葉が「正しい戦争を行い」と表現されているのである。

この「正しい戦争」という表現は、いわゆる「正戦論」からのものである。アウグスティヌスも、トマスも「正しい戦争」という表現を用いている。それはラテン語で *iustum bellum*⁽³⁾ である。

「正しい戦争を行う」をラテン語で表記すれば *iustum bellum gerere* である。場合によっては、「戦争」を複数形で表記して、*iusta bella gerere* と表す。

この *iusta bella gerere* をドイツ語にそのまま置き換えたのが、*rechte Kriege führen* である。つまり、「CA」はラテン語本文では *iure bellare* と表現しているが、そこで意味されていることは実は、*iusta bella gerere* と同じ内容なのである。

これはわたしの推測であるが、「CA」ラテン語本文は意識的に *iusta bella gerere* という表現を避けているのではなく、「戦争を行う」を *bellare* という動詞一語で表現したために（*bellare* という動詞は *bellum* という名詞からの「派生語」であって、その逆ではない）、そこで限定詞として立ちえるのが「副詞」（あるいは、副詞相当語）だけになったので、*iure* と副詞（尊格）表記したと思われるのである⁽⁴⁾。

こうしたことを考慮すると、「CA」の *iure bellare* を「正しい戦争に従事し」と訳したことについては、並行したドイツ語本文が *rechte Kriege führen* と表現しているように、そこで意図されている内容に則して、適切な訳語と思われるのである。

以上述べたように、「正しい戦争に従事し」（CA）も「法に従って戦い」（弁証）も、事柄に則した適切な訳語と思われるのである。

日本語の訳語の「揺れ」⁽⁵⁾は、無論、ないほうがいいことは確かである。しかし「CA」と「弁証」の本文そのものの「揺れ」は、もっと大きいのである。

CAラテン語本文 *iure bellare, militare*⁽⁶⁾

CAドイツ語本文 *rechte Kriege führen, streiten*

弁証ラテン語本文 *iure bella gerere, militare*

弁証ドイツ語本文 *Kriege führen, kriegen*

上に見るように、「弁証」ドイツ語本文にいたっては、単に「戦争を行い」となって、いま問題になっている「法に従って」も「正しい」も抜けてしまっているのである。

また、「CA」では *militare* をドイツ語本文は *streiten* と表現しているのに、その同じラテン語を「弁証」ドイツ語本文では *kriegen* としているのである。しかし4つの本文ともに表現は「すべて異なっている」が、「同一の事態」を意味していることに異論はないであろう。そうでなければ、そもそも「弁証する」ことにはならないからである。信仰告白に関連した文書は可能な限り誤解の余地を排除しなければならない。そういう文書の中で、「正しい戦争を行う」「法に従って戦争する」「戦争する」という具合に多様な表現を用いることが出来たのは、戦争について一定のコンセンサス、あるいは「常識」が、福音主義陣営とカトリック陣営共通にあったからである。それが「正戦論」である。

「CA」でも「弁証」でも伝統的な「正戦論」を批判的に検討しようという意図は全くない。そうではなく、それを「前提にして」論じている。そうであればこそ、「弁証」ドイツ語本文では「正しい」も「法に従って」も落ちて、単に「戦争を行い」と、戦争に一定の限界を設定する限定詞さえも省略されているのである。このような無限定な表現は、「正戦論」が前提になっていることを想定しない限り、理解できないことである。

6. 結 論

CAも弁証も、「正戦論」を前提にしている。*iure* という言葉で意識されているのは、「正戦論で正当とされている戦争を、正戦論で正当とされている戦い方によって」ということである。「CA」でも「弁証」でも、ラテン語本文は、そうした内容を *iure* という副詞（奪格）一語で表現したのである。

「法に従って」という訳は、そういう内容を持つ *iure* を日本語でも原文のシンタックスを保ちつつ「副詞句」に置き換え、「正しい」はそれを「形容詞」に置き換えて訳したものである。内容に則して言えば、それだけのことである。ここにあるのは「正戦論」である、ということをはっきりと言おうとすれば、「CA」ドイツ本文のように、シンタックスを変えてでも「正しい戦争を行う」と訳すであろうし、他方、原文の構造を可能な限り翻訳にも生かそうということであれば「法に従って戦う」と訳すであろう。

最後に

非常に図式化して言えば、古代教会は、戦争に対して「根本的な否」の立場であった。それが、コンスタンティヌスの改宗を契機にして、教会とその神学は戦争の正当化を行い出す。教会の立場は逆転したのである（もっともRGGはこうした見方を eine Legende と言っている）。その過程で重大な役目を果たしたのがアウグスティヌスであった（The Encyclopedia of the Lutheran Church は He made the important and, we are tempted to say, *fatal* distinction between just and unjust wars. と書いている）。トマスの「正戦論」も彼に依拠するところが多い。散発的に「非戦」を唱えるグループも現れたが、西方教会の主流は常に「正しい戦争」がありえることを原則的に承認してきた。この「CA」16条は、そうした西方教会の伝統の中で書かれたのである。

注

- (1) CAでも、弁証でも、この前後には ius と lex が区別して用いられている。

CA

1. iudicare res ex imperatoriis et aliis praesentibus *legibus*
2. supplicia *iure* constituere
3. *iure* bellare
4. *lege* contrahere

弁証

1. exercere iudicia ex imperatoriis *legibus* seu aliis praesentibus *legibus*
2. supplicia *iure* constituere
3. *iure* bella gerere
4. *iure* contrahere

legibus → lex の「複数・奪格」

lege → lex の「単数・奪格」

iure → ius の「単数・奪格」（あるいは副詞）

従って、何かの具体的な「法律」が問題になっているのであれば、ここでは iure ではなく、当然、legibus あるいは lege と表現することになる。

- (2) 「宗教改革もまた、戦争の思想について基本的に中世教会と同じ線上にある。この問題に関しては、とくに宗教改革的な遺産と呼ぶべきものはないようにみえる。宗教改革諸派は、再洗礼派を別とすれば、正戦論の伝統を踏襲した」（宮田光雄「兵役拒否のキリスト教精神史」、5「宗教改革の正戦論」）

カルヴァンは「キリスト教綱要」第4篇・20章・11節、12節で戦争を論じている。そこでは、「正当な戦争」という言い方で、戦争を正当化する論理

が展開される。すなわち、

官憲には、社会の秩序を維持する権威が与えられているが、その中には、必要があれば強制力を用いる権威が含まれている。「公的な刑罰を行うためには、時として武器を取ることが必要である」。

この論理がそのまま戦争の場合にも使われる。「そして、これと同じ根拠（すなわち、公的刑罰）のために、正当な戦争も起こるということを、判断し得るのである」とカルヴァンは言う。この部分は原文では次のようになっている
ex hac ratione simul aestimare licet, legitima esse quae sic suscipiuntur bella.ここでは「正しい（正義の）戦争」iustum bellum（複数形は iusta bella）ではなく、「正当な（合法的な）戦争」legitimum bellum（複数形 legitima bella）が用いられている。legitima bella という言い方であるが、彼もまた伝統的な「正戦論」に立っているのである。彼が意識的に iusta bella という言い方を避けて、legitima bella と言っているのかどうか、用語の違いによって伝統的な「正戦論」との違いを示そうとしたのかどうか、それは分からない。しかし、彼の論理はズバリ「正戦論」である。

ルターの場合にも、戦争を「原理的に否定する」考えは見られない。彼はアウグスティヌスに依拠しつつ、戦争を犯罪の処罰、平和のわざ、愛のわざと見る。軍人の職務もそれが正しく行使されれば、裁判官の場合と同様に、「神的職務」である。しかし他方、彼はその「二王国論」によって、十字軍のような信仰を防衛するための戦争は、この世と神の国とを混同するものだと否定する。悪名高き「二王国論」も、ここでは際限なく拡大した「正しい戦争」に歯止めを置く論理となっているのである（ルターについては、主として宮田光雄「兵役拒否のキリスト教精神史」に基づく）。

第2バチカン公会議以前のものと思われる The Catholic Dictionary はその War の項で、A State may justly declare war in order to recover territory of which it has been unjustly deprived, or reassert its authority over subjects who have declared themselves independant, or punish gross and wanton insults to its citizens while invested with public capacity and for several other causes.

The canonists hold that a State may lawfully make war upon a heretic people, which is actively spreading heresy, and stirring up dissension and rebellion within its own people; or upon a pagan people, which prevents the preaching of the Gospel, and refuse free passage to missionaries who desire to carry the light of faith to countries beyond.としている。（下線は筆者）

これでは、ほとんどどんな戦争でも正当化されるのではないか、とさえ思われる。ここに見られる「正戦論」と「現代世界憲章」との戦争観の違いは驚くべきものである。

なお富山房から出版された「カトリック大辞典」も、もはや古いものになったが、そこでは「戦争」の項目はない。

- (3) 「正戦論」における *iustum bellum* とは「正しい戦争」つまり、「正義の戦争」という意味であるが、ラテン語の元来の用法（古典用法）では、そういう意味で使われることは稀で、「正規の戦争」という意味であった。つまり、奇襲、待ち伏せ、小競り合いといった「正規なものでない戦闘」に対して、「正当な手続きをもって始められる戦闘」のことを意味した。a regular war entered on with due formality と、ある辞書は解説している。これが神学用語に取り入れられて使われるようになってから、「正義の戦争」という意味を獲得した、というのが *iustum bellum* の背景である。

トマスは「神学大全」の *Secunda Secundae* の第 40 問で戦争を論じている。問いは次の 4 つの項目に分かれ、各項が順次論じられていく。

1. *utrum aliquod bellum sit licitum* (ある種の戦争は許されるか)
2. *utrum clericis sit licitum bellare* (聖職者が戦争するのは許されるか)
3. *utrum liceat bellantibus uti insidiis* (戦う者が策略を用いるのは正当か)
4. *utrum liceat in diebus festis bellare* (祝日に戦争するのは正当か)

第 1 項では、例によって始めに、問いに否定的な「すべての戦争は罪である」という論拠が重ねられ、次いでその反対命題が挙げられる。こうしてふたつの相対立する立論を掲げたうえで、トマスの所論が *Responsio* (回答) という形で述べられる。ここに、トマスの「正戦論」が展開されていく。

Dicendum quod ad hoc quod aliquod bellum sit iustum, tria requiruntur. 「ある戦争が正義のものであるためには、3 つのことが要求される、と言わねばならない」として、順次それを挙げる。

Primo quidem, auctoritas principis, cuius mandato bellum est gerendum. 「第 1 には言うまでもなく、その人の命令によって戦争が行われることになる主権者の権威である」。途中の説明を省いて、第 2、第 3 の必要事項を挙げると、

Secundo, requiritur iusta causa 「第 2 には、正しい理由が要求される」。

Tertio, requiritur ut sit intentio bellantium recta. 「第 3 には、戦闘する者たちの意図が正しいもの（曲がっていないもの）であることが要求される」。

この 3 つの条件が満たされて初めて戦争は正しいものとなる、これがトマスの主張である。

- (4) *iustus* (その中性形が *iustum*) から派生した「副詞」は、*iuste* (正しく) である (派生関係: *ius* → *iustus* → *iuste*)。従って、この場合に、なぜ *iuste bellare* にしないで、*iure bellare* としたのか、という疑問は一応ここで検討する必要があるようである。実際に、次のような用例が Oxford Latin

Dictionaryには記載されている。

iuste …… *bella non minus quam fortiter* …… *gerere*. (勇敢にまたそれに劣らず正しく、戦争を行う)。

この場合には、*fortiter* (勇敢に) と *iuste* (正しく) とが対比されて、戦闘に従事した者たちの「戦いぶり」が表現されているのであるが、この文例を見る限り、*iuste* は、戦闘において「卑怯な戦い方はしないで、立派な戦い方をする」という意味のようである (O. L. D. では *honourably* という訳語を挙げている)。とすれば、トマスが「正しい戦争」(*iustum bellum*) の条件として挙げた3つ目の条件、「戦う者が正しい (*recta*) 意図を持つ」という意味での「正しく」ということのように思われる。そうであれば、「正しい戦争」の条件の一部しか満たしていないわけで、戦争に関わって *iuste* が用いられる場合には、そのような意味で使われたのかもしれない。そうであれば、この場合には、やはり不十分な表現となる。いずれにしても、*iuste* よりは *iure* のほうが、その派生関係から見ても、広い概念である。

あるいは、必ずしもそのような意識的なことではなく、この少し前の文章の中で、

exercere iudicia, iudicare res ex imperatoriis …… というように、*ius* に関連した言葉が現れ (*iudicare* は *ius + dico*, すなわち「判決を下す」「法的な決定を出す」という意味である)、更に、直前の文章で *iure* が使われている (*supplicia iure constituere*) とところから、それに引きずられて (あるいは、文体上の考慮から) *iure* とした、という単純な理由からかもしれない。

弁証では、*iure bella gerere* となっている。ここでは、*bella gerere* と名詞+動詞になっているので、限定語を形容詞にして *iusta bella gerere* とすることが出来たわけであるが、ここでも *iure* が使われている。ここではその直前、直後に *supplicia iure constituere, iure contrahere* という具合に限定語として *iure* が繰り返されているところからすると、案外そういう文体上の理由からかもしれない。

その傍証と思われるのは次の事実である。

CAでは、商取引に関連して *lege contrahere* という表現がある。商売をする時には違法なことはしないで、法律に従って行う、ということであるが、この部分が弁証では、

iure contrahere になっているのである。

CAでも弁証でも語義に従って、*lex* と *ius* とは区別して用いられていることは先に指摘したが、この弁証の部分ではCAの *lege* が *iure* に変更されている。これは、*contrahere* の限定語を *lege* から *iure* に意識的に変えたというよりも、おそらく、*supplicia iure constituere, iure bella gerere, iure contrahere*, …… と続く、言葉の勢いを考慮してのことであろう。

しかし、これはわたしの推測であって、確信をもってそう言っているわけではない。

- (5) 翻訳には「揺れ」はつきものであるが、参考までに、この16条の部分のタッ

パートの英訳を見てみよう。CAラテン語本文と弁証ラテン語本文とが全く同じ表現をしている箇所を英訳ではどう訳しているか

CA	弁証
1. gerere magistratus	1. gerere magistratus
2. exercere iudicia	2. exercere iudicia
3. supplicia iure constituere	3. supplicia iure constituere
4. militare	4. militare
5. tenere proprium	5. tenere proprium

CA英訳	弁証英訳
1. hold civil office	1. hold public office
2. sit as judges	2. render verdicts
3. award just punishments	3. prescribe legal punishments
4. serve as soldiers	4. render military service
5. hold property	5. own property

以上はそのごく一部なのであるが、ラテン語で同一の表現が、英訳ではこのように揺れているのである。しかし、意味する内容は同じなのであるから、それ程こだわることはないようにも思われる。

なお逆に、原文では違った表現が英訳では同一の表現になっている例がある。それが、いままで問題にしてきた箇所である。原文では *rechte Kriege führen* (CAドイツ語本文) *iure bellare* (CAラテン語本文) *iure bella gerere* (弁証ラテン語本文) と、表現はすべて違っているが、英訳ではどれも、*engage in just wars* となっている。

また、単語や句のレベルだけでなく、構文そのものも違っている例がある。

quod christianis liceat gerere magistratus……(CAラテン語本文)

quod liceat christiano gerere magistratus……(弁証ラテン語本文)

イタリック部分は、*gerere magistratus* とか *exercere iudicia* とか *iure bellare* のように、「この世の正当な秩序」が具体的に不法法で表現され、そうした個々の不法法表現全体に係る非人称動詞による述語部分である。CAでは *christianis* 弁証では *christiano* と、意味上の主語になる語に複・単の違いがあるが、個々の不法法表現で表された行為が *liceat* (正当である) と、締めくくられる非人称動詞構文である。英訳ではこれを、CAの訳文では、*that it is right for christians to hold civil office*……と、この構文を訳す際の通常の文体で訳しているが、弁証では、*that a christian might legitimately hold public office*……と、与格 *christiano* を主格に換える形で構文の変更をしている。

- (6) CAでも、弁証でも、ラテン本文には *militare* という言葉が使われている。この語は、それぞれのドイツ語本文では、*streiten, kriegem* となっている。ドイツ語本文を見る限り、特に弁証ドイツ語本文では、*Kriege führen, kriegem* とほとんど「同義反復」であるが、ラテン語本文の *iure bellare* (*bella*

gerere), militare の場合には、ひとつの「対比」になっている。

すなわち, bellare (bella gerere) では、「戦争を行う」主体が「国家、領邦」などの「共同体や社会」であるのに対して, militare は「兵士となる, 軍務につく」と、その主体が「個人」であることが、その違いである。

キケロの中に次のような用法で militare が使われている。

in cuius exercitu Catonis filius tiro *militabat* 「その部隊で、カトーの息子は若い兵士として軍務についていた」。

militare は、特別な場合 (militare が「受動態」に置かれ、更に、戦争に関連した言葉が「主語」に立てられる場合) を除いては、「兵士になる, 軍務につく」というように、個人に関わって用いられる語である。

つまり、ラテン本文では、「国家、領邦として」戦争を行うことは正当であること、また同様に「個人として」も、兵士となり・軍務につくことは正当であること、が主張されているのである。これは、「兵役拒否」の問題との関連がある。

弁証の中に次のような文章がある。「背教者ユリアヌスやケルススやその他の多くの者がキリスト教に反対して、福音が復讐を禁じ、また、その他この世のかかわりにふさわしくないことを教えるがゆえに、この世の統治を破壊するものだ」と述べた。これらの問いはオリゲネスやナジアンゾスやその他の人々を大いに悩ました」(「一致信条書」317頁)。2世紀中頃まで、教会は「福音と戦争」との関連について深く悩むことはなかった。徴兵制度はなかったし、受洗したキリスト者は兵役につかないのが当然のように考えられていた。すなわち、キリスト者にとっては戦争と流血は、その信仰と相入れないものであった。しかし、ローマの軍団の中でキリスト教への改宗者が次第に増えてくると、問題は複雑になった。かなりの者は軍籍を離脱したが、兵士として留まる者も多かった。

「兵士であること」と「信仰者であること」とは両立するのか、それとも、両立しないのか、この問題は次第に深刻になった。キリスト者であることを理由に軍務につくことを拒否して殉教する者も出た。

こうした問題に答えた初代教会の代表的な神学者は、オリゲネス、テルトゥリアヌス、キプリアヌス、ラクタンティウスなどであるが、彼らはそろって「兵役拒否」が信仰者の取るべき道である、とした。これに対して「ケルススその他の多くの者が、(それは)……この世の統治を破壊するものだ」として、キリスト者が取った兵役拒否とそれを命じるキリスト教信仰を、国家秩序・法秩序を破壊するものとして攻撃したのである。

しかし、コンスタンティヌス大帝の改宗、アルル教会会議、アンブロシウス、アウグスティヌスなどを経て、振子は逆に振れることになる。「アルル教会会議」は「平時に武器を捨てる者は、聖体拝領から除外される」と規定した。教会のこの問題に対する態度は逆転したのである。